カールズバード鐘乳洞

正井泰夫

１９７５年の夏の３ケ月，日米両国政府間の国際理解教育専門家会議のために，アメリカの各地を訪ねる機会を得た。日本側からは６名が参加したが，それぞれが文化・社会に関するテーマをもってアメリカのあちこちを回ったり，人と会ったりすることとなった。私のテーマは都市化とレクリエーションであった。このテーマを身をもって体験するには，国立公園を見て回るのも一つの方法と考えた。今回の旅行の前に，すでにイエローストーン・グランドティートン・ロッキー山岳・メサベルデ・グランドキャニオン・ヨセミテなどの国立公園は見ていたので，今回はグレートスモーキー山脈・ハワイ火山・カールズバード鐘乳洞・グアダループ山地の４国立公園を見ることにした。なかでもカールズバード鐘乳洞は圧巻であった。

１０月４日，秋晴れの中をエルパソからバスで東へ向う。テキサス最西端のこの地は，アメリカ西部の雄大な景色の連続である。乾燥景観が窓の外に展開し，楽しい旅を続けることができる。やがてグアダループ山地国立公園の名所のエルカピタンの岩壁が目の前に見えてくる。この雄大なビュート状のメサを過ぎて間もなく，道はニューメキシコへ入る。

カールズバード鐘乳洞は，ニューメキシコ南東部のメサ地形の中にある。今から約２億５０００万年の昔に堆積した石灰岩層の中に，いくつもの鐘乳洞が見られる。この国立公園の範囲内だけでも５０もの鐘乳洞が存在している。しかし，何といっても，このカールズバードの右に出るものはない。世界最大ということばが適用できるのである。ケンタッキーのマンモスケーブ鐘乳洞は総延長約300kmというとてつもない長さをもつが，ここは最長ではなく最大なのだ。

乾燥したメサの上に公園センターがある。そこから数分歩くと洞穴の入口に達する。サボテンが周りをとり囲んだ竪穴状の入口であるが，この中が最大規模の地下洞となっているとはちよっと考えられない。とにかく３ないし４時間かかる洞穴中の通路を歩くことにする。

通路はぐんぐんと地底へと下っていく。あちこちに巨大な鐘乳石や石筍が見られるが，まあ，特にとりたてていうほどのことはない。約１時間ほど歩くと，公開されている部分としては最低の（もちろん高度が最低なのであって価値が最低なのではない）所へ着く。その美事さ。例えばKings Palaceと呼ばれる地下殿堂。阿武隈洞もずい分と美事だと思ったが，それこそ比較にならないほどの美しさである。照明効果がよいせいもあるが，満艦飾というか華麗というか，何百何千という大小の鐘乳石や石筍がある。直径数cm以下で長さが１～５ｍもあるような（根本はもっと太いが）鐘乳石が何百と狭い範囲にぶら下っている様や，どう見てもシャンデリアとしか思えないようなもの，それに大小さまざまな石柱。すべてが地下の殿堂を形づくっている。

そこからしばらく行くと，洞穴内の中央部に出る。ここには地下食堂がある。冷い辯当を買って食べる。そのすぐ横には地上へ直接出られるエレベーターがある。この辺で地面から約２００ｍ下である。

ここから先へ行くと，Big Room といわれる世界最大の地下室へ着く。起伏はかなりあるが，とにかく約８００ｍ先までが見え（照明した場合），床の広さは１４個のフットボールフィールドに相当する。ところどころに座れる場所がある。説明文を読むと，ここにしばらく座って考えろとある。巨大な地下洞の異様な空間を見ていると，何千万年，何億年という年月の歩みが重くのしかかってくるようである。天井の高さは２０～３０ｍないし数１０ｍもあり，最も高い所では，ワシントンの連邦議会のあの大きな建物を上回るという。

石筍の美事さも相当なものである。オベリスクのように細長いもの，クリスマスツリーも顔負けするようなきれいなもの，月世界を思わすような景観が展開する。色もさまざまである。全体に白っぽいことは当然であるが，赤味を帯びたもの，少し青っぽいものなどが単調さを破ってくれる。

約４時間の地下旅行中，たくさんのレインジャーに会った。女性のレインジャーもいる。毎日たくさんの人に会うというのに，皆きわめてあいそがいい。すぐ向うから話しかけたり，あいさつしたりする。管理人であるとともに，説明指導員でもあり，また人々の心を豊かなものにしてくれる親しい友人といった感じである。見張り番なのだけれど，そうと感じさせないところが本当に美事であった。

師　と　友　と

岡　田　久美子

「卒業２０周年のクラス会よ」といったら，我が家の子供達はとんでもなくびっくりした顔をした。改めて親の年令を数え，顔のしわを眺めたに違いない。

ともあれ，或る爽やかな初夏の日の午後，遠来の友を迎えて，何年振りかしら……という珍らしい顔も揃い，互いにひとときの歓を尽くすことが出来たのは嬉しいことであった。飯本，赤木，松井の三先生には，お出まし難いところを請うて御来駕頂き，神宮の森にほど近い，前栽を配した和室にくつろいで，ひとりひとりの近況やら，昔語りに賑やかな話の花が咲いた。

齢８０を数えられる飯本先生が，テレビの語学講座で新たにお勉強と伺っては，怠け者一同背筋を正さざるを得ない。在学中赤木先生が，私共を如何に“ご婦人”として慎重に取扱って下さったかを知り，改めて恐縮したり……。また松井先生の何時に変らぬ温顔は，２０年の歳月をすっかり忘れさせて下さる不思議な力を持つ。師とは，こちらがいくつになっても或るよりどころを惜しみなく与えて頂ける存在であるらしい。

転じて我々はといえば，勤続２０年，今や貫禄充分の社会科主任殿。大学生の息子とよろず対等にやり合っているステキなママ。更には国の内外をあちこち歩き廻って来た人等々……。旅の話は殊に楽しい。思えば学生時代からよく旅行に出掛けたクラスだった。勿論正規の巡検だけで満足する筈はなく，モグリの巡検を折にふれては計画し，実行に移した。九州にも行ったし，北海道にも足を延ばした。開聞岳の頂上で聴いた長閑な鶯の声や，洞爺丸台風で荒れた噴火湾の波濤などが，今も耳に眼に残っている。

とにかく，「出掛けたがる習癖」と「食べたがる習癖」とは，２０年を経過してもなお聊かも衰え